

社員研修と称して私たちひと・まち社スタッフが、きみまち舎を訪ねたのは新緑の季節、白神山地のブナ林がもっとも美しく萌えるときだった。きっと今頃は目を見張る紅葉に変わっているだろう。



「研修」というのは、きみまち舎の主宰者小坂球実さんが提供するエコツーリズムのプログラムの一つ、白神山地の里山の暮らしを体験する盛りだくさんのツアーである。

白神の里のくらし体験

私たちは、きみまち舎の宿泊施設、築50有余年の民家を改修した「森のかぞく」に荷を下ろし、白神山地のブナ林の散策に出かけた。世界遺産のブナ林に足を踏み入れる事は出来ない。そこで、山続きの岳岱自然観察教育林が見学者には開放されている。遠くから見る大きな森は、中に入ると思いがけなく明るい緑の空間になっていて、下草にも点々と木漏れ日がさしている。リスが隠したブナの種子から小さな群れとなって双葉が芽吹いていたり、銀鈴草や名も知らぬキノコたちに出会ったり、倒木の上に新しいブナが命を繋いでいたり、熊の爪あとを残す200年以上の大木を見たり、おいしい清水を飲んだり、白神を命がけで守った市川善吉さんの案内で豊かな自然を満喫した。

夕食はきりたんぼ。秋田こまちのご飯をついて太い四角い串に丸く巻きつけ、囲炉裏の灰に突き立てて焦げ目をつける。比内地鶏と里のキノコや野菜をたっぷり賞味した。果実酒や、梅干、野菜までも作者の固有名詞が紹介された。

翌朝は、裏山の中腹にある小坂さんが借りている棚田にでて牛糞を堆肥としている田の草取りと、山

菜取りをして、香ばしい焼きおにぎりを田の畔でほおぼった。昼食後は高齢で食肉として出荷される手はずの牝牛「たきこ」に天寿を全うさせる運動として創設した基金で、買い取られた2頭の牛を町営牧場に見に行った。たきこは昨年無事に天寿をまっとうし、その最後の子がこの牧場で草を食べていた。

ボランティアといのちを育む

白神のブナ林が世界遺産に登録されたのは1993年。1996年東京の出版社を辞した小坂さんは故郷の秋田に帰り、「秋田自然を守る少年団」25周年記念カレンダーを制作する中で白神の人々と出会い、白神山地の南麓、藤里町にきみまち舎を構えたのが、旅行企画のきっかけとなった。しかし、ツアーで提供



昭和前期建築の民家を改修した「森のかぞく」

できる自然と共生する里山の循環型の生活スタイルは土地の文化と切り離す事は出来ない。忙殺される都市生活から逃れ訪れる旅人に、心身を立て直す一時を提供するには、背後に健全な地域社会がないと苦しい。自殺率日本一の秋田を返上できないかと、たとえば県下のドメスティックバイオレンス(DV)被害女性の

駆け込み寺など、小坂さんは「森のかぞく」を舞台に賛同するボランティアと一緒に新しい取り組みを始めている。2003年8月には「DV被害者の自殺を防ぎ、加害者更正の手がかりをえよう」と、いのちのかけがえのなさをうたう“李政美コンサート”を主催、また10月には、米国から2名のカウンセラーを招き、鷹巣町の公民館で(DV)問題を考える国際シンポジウム「アメリカの経験に学ぶDV・被害者・加害者対策」を開催した。

白神に学び、里の豊かさを再生したいという小坂さんの循環型有機農業やいのちの森を育む活動に賛同する人は、県内外にひろがっている。